

# 熊谷 次郎 直実 (くまがいじろうなおざね) (1141 ~ 1207)

平安末～鎌倉初、武蔵国熊谷郷（現：熊谷市）で活躍した武将。法名蓮生（れんせい）。当初は平家に仕えていたが、後に源頼朝の御家人となり、数々の戦で名を上げる。頼朝から、「日本一の剛の者」と言われ、鎌倉幕府成立に貢献した。

源平の合戦で、平家の若武者「平敦盛」を討ち取るが、息子ほどの若者の命を奪ったことに戦の無情さや世の無常観を感じる。このことは「平家物語」に描かれ、能や歌舞伎でも上演されている。

一ノ谷の戦いで敵を探し求めていた直実は、波打ちぎわを逃げようとした平家の貴公子を呼び止め、一騎打ちをする。直実が彼を馬から落とし、首を取ろうとすると、ちょうど我が子ぐらいの年の若武者だった。直実は、逃がそうとしたが、背後に味方が迫る中、同じことなら自分の手にかけて、後世の供養をしようと、泣く泣くその首を切った。この後首実検して平敦盛と判明、高貴な人物であったと分かった。このことから、直実の仏門に帰依する思いは、いっそう強くなった。（『平家物語』より）

## エピソード【出家】

不仲だった叔父との領地争いで、頼朝の前で裁判が行われた。口べたな直実は質問に上手に答えられず、書類を投げ捨て座を立ち、刀を抜いて髪を切って出家してしまった。京都で法然に弟子入りし蓮生を名乗る。修行を重ね、熊谷の熊谷寺（ゆうこくじ）など、各地に寺院を開いた。

## エピソード【逆さ馬】

京都から関東に戻る時、西を背にすると、浄土の阿弥陀仏に背を向けてしまうと言って、鞍を前後さかさまに置き、逆向きに馬に乗り、西に背を向けずに帰った。

## エピソード【大往生】

自分の死期を悟った直実は、故郷熊谷に戻り、予言どおり人々の見ている前で、合掌・念仏を唱えたまま往生した。



熊谷駅前に建つ直実像



## 「ニャオざね」

ニャオざねは、熊谷市の「市民活動イメージキャラクター」です。

猫の鳴き声に熊谷の武将「熊谷次郎直実」公をプラスしました。

ニャオざねが市民活動の「招き猫」となって欲しいという願いも込められています。